

氏名	桂川 美帆
ヨミガナ	カツラガワ ミホ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第479号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 <sup>けしき</sup> 気色を染める ーろうけつ染による藝術表現の可能性ー 〈作品〉 <sup>けしき</sup> 気色を纏う

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	菅野 健一
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小松 佳代子
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	上原 利丸
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	三田村 有純

（論文内容の要旨）

染色作品には特有の美しい色彩や、防染することで得られる特異な見え方がある。一般的な絵画に見られる絵の具により表現された状態は、表層に現れた事象である。しかし染色は物質自体を発色させる行為である。染液が繊維の芯まで染み渡った時、透明度が高く鮮やかな、それでいて重厚な色彩を得られるのである。それは、素材自体の発色として観る者に強く訴えかける。私はその美しい色彩と、絵の具とは異なる質感に魅せられ、染色という表現方法を用いて作品を制作している。

本論文は自身の藝術表現の本旨となる心の揺らぎと眼差しの変化についての見解を論じ、自身の内面表現に最適である「ろうけつ染」に焦点を当て、これまで行ってきた自身の研究を元にその特性を詳述したものである。ろうけつ染は蠟を防染剤とした染色技法である。古くは「臈纈」と呼ばれ正倉院宝物にも見ることが出来るが、その後一時途絶え、明治以降に再興された技法である。本論文を通して、染色技法の伝統を踏まえながらも規範に縛られない染色における装飾的且つ絵画的表現の可能性を明らかにすることを目指した。

第1章では、私の創作イメージの根源について叙述した。第1節では、自然界の移り変わりに対する観察を原点に、「移ろいゆく心の変化」に着目するに至った経緯を述べた。自然界の風景とその捉え方を手がかりに、心の変化に左右されて物事を捉えている我々の眼差しの曖昧さと移ろいについて考察し、鑑賞者が日々の感情に目を向けるよう働きかけることを目指す、私の創作の原点について述べた。第2節では、第1節で述べた「心がもたらす眼差しへの影響」に対して、日々の中で接する美しいものや感覚に訴えるものの蓄積が、総じてものの捉え方を形成するのではないかという仮説を立て、「日々の眼差しがもたらす心への影響」について論じた。第3節では、「客観的な視点<sup>けしき</sup>によって共通認識できる対象物」を「景色」と呼び、対して「主観的な心の気配を感じ取る対象物」を「気色」と表記した上で、「気色」を提出作品のモチーフに定め、自然の持つ美質とともに、それらに感化され私の心の中に生まれた情感を視覚化することを創作の目的とした経緯を明らかにした。

第2章では、技法や素材、構図について、自作品のあり方を再考した。第1節では、制作における実体験を元に染色の特性を論じた。「染める」という言葉から引き出されるイメージについて和歌を元に考察し、創作のモチーフとなる「気色」との関連性について述べた。第2節では、自作品の素材である「布」について考察した。「布」が持つ美質は「気色」を想起させるのに適しており、たおやかな存在、包まれる安心感は、自身の表現したい作品の世界観を支えている。第3節では、日本の伝統文様や参考作品との比較において、うつろいゆく感情の様子を表現し得る作品形態や構図について考察し、自作品の目指す作品のあり方を再認

した。

第3章では、他の染色技法ではなく、ろうけつ染によって表現を行う理由を技法面から明らかにした。第1節では、ろうけつ染伝承の流れについて述べ、制作経験を元に、ろうけつ染の衰退の原因について考察した。一方、ろうけつ染に顕在する魅力を分析し、今後の技法の伝承と発展の為にその特殊性を明らかにした。第2節では、ろうけつ染特有の防染と染色を繰り返すことで得られる「色彩の積層」に焦点を当て、ろうけつ染が有している「積層が織りなす美」について述べた。我々の「物の捉え方」もまた、「眼差しの積層」によって成立しており、思想と技法の結びつきについて詳述した。第3節では、絵の具による絵画作品との比較によって、ろうけつ染による質感を伴う色彩の魅力について再考した。さらに、「滲み」という染色における現象と、第1章で述べたイメージの起源との関連性を明確化した。自作品の中で特に重要視している「かすれ」、「ちらし」、「エッチング」、「点描」、「うつし」などの筆を用いた蠟のテクスチャー表現について図とともに解説し、「染め描く」という自作品の独自性を考察した。ろうけつ染特有の大胆で伸びやかな表現、多彩なテクスチャー表現があるからこそ、私が伝えたいと考えている情感あふれる世界観を示すことが可能であり、自作品が成り立っていることを明らかにした。

第4章では、自作品について述べた。第1節では、自身の修士課程修了制作以降の研究制作を元に、「気色」を想起させる作品のあり方を探求した成果を示し、自作品の表現内容を作品写真と共に解説した。第2節では、自身の修士課程修了制作を例にろうけつ染の制作工程を述べた。第3節では、提出作品についてイメージの深層を詳述し、第4節では、提出作品の制作過程を示した。

以上の考察から、結章では伝統染色技法であるろうけつ染を用いる意義について述べ、ろうけつ染の今後の可能性と併せて本論文のまとめとした。

#### (論文審査結果の要旨)

提出論文は、筆者の藝術表現の根幹にあるイメージと表現技法であるろうけつ染とを重ね合わせて、制作工程を丁寧に論じることで創作の根源にある内面世界を客観化するとともに、新しい藝術表現としてろうけつ染を位置づけるものである。

美術作品は感情に目を向ける糸口となるものであると位置づけたうえで、時の移り変わりとともに揺らぐ感情に私たちの眼差しが影響を受けること、また逆に眼差しの蓄積が感情に刺激を与えることを論じ、それゆえに美術家は美しいものを創る必要があると述べる。主観的な心の気配を感じ取る対象を「気色」として客観的な「景色」と区別し、染色という行為自体が「気色」に浸されたときの感覚を呼び起こすのに相応しい現象であるとする。「染める」という言葉を、生地に染料が染み込む様子と感動が心の芯に浸透する様子という二重性のもとに捉え、染色表現の特徴を描き出している点に独自性が見られる。具体的には以下の点において優れている。

第一に、同じく平面作品である絵画表現と比較してろうけつ染による藝術表現の特徴を描き出している点である。筆による蠟置きは描くという行為に近く絵画に通ずる描画表現が可能であるが、染料は何色重なっても絵の具のように物質的に積み上がることはなく、生地は生地としての平面性を保つ。物の芯まで色を変化させてしまう染色は、物質自体を発色させることで、色を塗るのとは異なる透明感を持つ。絵画とは異なる染色表現のこの特質ゆえに、感情の浸透と重ね合わされる。

第二に、複雑なろうけつ染の工程を詳述しつつ、単なる技法説明に終わるのではなく、防染と染色を繰り返す色彩の積層によって形を描いていくろうけつ染特有の美と、心の内を見つめる契機となる眼差しの積層とを重ね合わせている点である。色彩の積層が時の経過を表象するのに加えて、筆者が作品に用いる「滲み」や「ぼかし」などは色彩が消えゆくかのような流動性を表す。それは作品に多義的イメージを与える表現技法であると同時に、うつろいゆく心のゆらめきや曖昧さを表象するものでもであると論じている。

第三に、イメージの背景を支える布が鑑賞者を包み込むように展示されることで、気色を纏う感覚が生み出されるとしている点である。布の繊維に染料の分子が親和すること、染めた布を通して鑑賞者と制作者の心が親和することを重ね合わせている。またろうけつ染特有の強固な防染力によって両面からの染色が可能になり、布の表裏の関係を心の表層と深層とを示すものとして、ここでも作品と内面との二重性が追究

される。

このように、幾重にも染色表現と感情表現とを重ね合わせて論を展開することで、自らの作品を意味づける議論には説得力がある。うつろいゆく感情を表現する文様や構図の考察とともに、素材本来の美質を生かし技法の特性に応じた作品づくりが「工藝」の根底にあると見ている。制約が多いうけつ染の不自由さを受け入れ、自らの技術に奢ることなく素材と技法に向き合うことで、ろうけつ染を藝術表現へと昇華させようとする筆者の姿勢は、爽やかな読後感をもたらすものである。このような点から審査会において課程博士論文として優れたものであると審査員全員一致で評価し合格とした。

#### (作品審査結果の要旨)

日本のろうけつ染の歴史は古く、論文の中にもあるように奈良時代の正倉院の収蔵品の中にも見られる。その後、社会的背景や気候風土的な要因も加わって明治期にいたるまで途絶えているのも同然であった。鶴巻鶴一氏の研究によって再興するが、その内容は、産業的工芸品というよりは創作的な美術としての工芸品として社会に位置づけられていく。その結果ろうけつ染めによる染織作家が京都を中心に現在まで活躍していく。

このような歴史的な流れの中で、独自のろうけつ染めの世界を展開していくことは、創作の独創性という点において、先人達の表現の隙間を見つけることに等しい段階が戦後続いていると言える。

桂川氏の表現の独自性は、テーマの「気色を染める」に集約されている。同じ景色でも自分の心のありようによって対象は違った表情となる。景色は客観的な存在ではなく見るものの心のありようによって変化する、それらが気色である。氏はこのテーマを表現するのにろうけつ染めの技法、染料、被染物の素材の特性を研究しながら的確に生かそうとしている。氏が染織の道にいたるまでに油絵の制作を続けていたこともテーマに大きな影響を与えていると考える。顔料と染料の浸透度の違い、硬いキャンバスと柔らかい透過性のある布地との相違などを深く追求することに繋がっている。

顔料はあくまで下地の色料に重なって物質の層となって積層していく。染料は積層といっても、重ねた色料は生地には吸収され下地の色料に染み込んで溶け込んでいく。ろうけつ染はさらに防染することによって、生地白の美しさは当然であるが、かたちを段階ごとに積層した色で表現することにも適した技法である。さらに日本独特の表現とも言える暈かし、にじみ、ろうけつ染のかすれ、ひび割れ等を組み合わせることでテーマと表現を深く結びつけることができる。氏はろうの強い防染力を生かし両面から染め、染料の透過性と布地の柔軟性を空間表現生かすことにも積極的に研究を重ねている。

以上の点を踏まえた上で、博士展における「気色を纏う」と題した作品は、草木を主要なモチーフとして、気色があるいは眼差しが、うつろいゆくように11枚の絹地に空間を生かす形態で表現された大作である。これだけの大きさになると散漫な表現になりやすいが、全体の中心をはずしやや左寄りに主要な花を配置し、生地白の美しい花を背景の黒で際立たせることで、作品全体に緊張感を巧みに与えている。さらに柔軟性のある薄い絹地と染料の積層、透過性によって見るものを包み込んでいくような印象を与える。

少し技法が総花的になっている点は、テーマと表現を高い時点で追求する上で今後の研究課題の一つと言える。この秀作を起点にさらに高度な研究制作と作品を期待している。

#### (総合審査結果の要旨)

提出論文及び提出作品は「気色」をテーマに論考しながら、それを「ろうけつ染」という染色技法で作品として表現したものである。美学者の佐々木健一氏は“けしき”を感性的にとらえられた空間の全体的特性と論じているのに対して、本人はそれを主観的な心の気配を感じ取る対象物というように、美術作家としての捉え方をしている。心の中に生まれた情感を視覚化することが本人にとっての制作行為といえる。万葉集の「寄物陳思」の思想を引用していることで、そのことが理解できる。今日見る月は昨日のそれとは明らかにちがうという比喻により、風景としての景色は変わらなくても心の変化、つまりその時の精神状態により対象物の見え方が違ってくるといえる。それは景色を捉える眼差しというものが、つねに揺らいでいる

からである。それをたおやかな存在としての“布”に透明度のある染料で染色することで表現が可能であるとしたことに本研究の中心的テーマがある。

染色技法には、古くは正倉院に残る大陸伝来技法の夾纈・纈纈・臈纈がある。その後の遣唐使廃止や律令制が崩壊し封建制に移行して行く段階で、三纈に替わって型染や友禅染が現れた。それらの技法によるものは同一平面上に表現された図柄である。しかしながら、明治以降にはじまる「ろうけつ染」は臈纈やジャワのパティックとは違い、ロウによる防染を繰り返すことで、色彩の積層表現を可能にした。先行の研究等を精査した結果、本人は「ろうけつ染」と語彙を定めた。それは“物の捉え方”と“眼差しの積層”という情感を視覚化することに合致した表現技法である。心という情感を絵画と同等な平面表現として可能とさせる、ろうけつ染技法による図像化である。しかしながら、絵の具という色料で描かれた絵画とちがい、染料により染色されて布上に表現された図像は光を透過して、背面からも鑑賞できる。一方向から観る絵画特有の二次平面の世界ではなく、四方から鑑賞できることで作品自体が三次元空間に存在する〈もの〉となり、本人が描こうとする「気色」を写し込むことができた。これは“布”というたおやかな存在が風に揺らぎ、光を受けて変化することで明晰なかたちで、「気色」が現れたことになる。ここに論述と作品との合致がみられる。

「気色を纏う」というタイトルで制作された作品は（縦270cm×横90cm）5点、（縦270cm×横80cm）4点、（縦270cm×横70cm）2点の11点が横方向に並列されたものである。シルクデシンの光沢のある布地を使用することで、透明感のある明るい色相を美しく表現することができた。上述のように光と空気が流れることで、時間的経過さえも感じ取ることができる。モチーフの花は優美さを現出させる一方、無常観さえも漂わせている。

シルクデシンという絹地は繊細であるために、非常に扱いにくく染色しづらい布地であるが、これまでの経験年数に比して、かなりの点数の制作を経験してきたことにより、支障無く完成に至った。ろうけつ染は後戻りのできない表現技法であるために、明確な設計が描かれていなければならない。意のままに完成させるに至ったことは、常に真摯な姿勢と不断の努力によるものである。

論文と作品の整合性の根幹をなすものは、内包する万葉的精神性や本居宣長のいう「わかまえる」ことについて考察しつつ、「眼差しの積層」と「色彩の積層」を導きだしたことにある。染めるという行為によって「気色」を具現化し自己の思想を持つに至ったことは、今後の研究の深造にも多いに期待できるものとして、本研究を評価し合格とした。